愛

Aブロック全作品と講評

www.columnland.net

A-1

あなたは誰に

ᠳᠣᠣ ᠠᠮᠠᠨ

ba Hibbik 我愛你

Mahal kita I love you.

Я люблю тебя te quiero

Ich liebe dich Ek is lief vir jou

ᠶᠣᠣᠳᠣᠣ Yo tee quiero

Yes kez sirumem 사랑해요

seviyorum. Gihigugma ko ikaw

Seni seviyorum te quiero

ᠵᠢᠨᠢ ᠠᠮᠠᠰᠤᠨ

Je t'aime

個性ですか？

A-2

プロローグ

その昔、地球上には高度な技術力をもつ者たちが繁殖していた。しかしその技術力は地球の環境を破壊し、地球上は生物が生きることのできない環境になってしまった。彼らは事前に地下に無数のシェルターを設置、そこで生活することで難を逃れていた。

しかしながらこのシェルターは強度の都合上、一か所に一家族が住むのが精一杯の広さだった。避難後は誰も外に出ることができず、他のシェルターとの交流は不可能であった。

そこで開発されたのが「アバター」であった。彼らは「アバター」と各神経をシンクロさせ、まるで自分の体のように操り、地上へ出る必要があればすべて「アバター」を利用した。

一見これですべての問題が解決したかのように思われた。しかし数十年後新たな問題が発覚した。

子孫の問題である。

まず「アバター」には生殖活動を行う機能は備わっていなかった。また、彼らの交流は「アバター」のカメラを通してのものだったため、恋愛感情自体芽生えることが少なくなっていた。

科学者はすぐに対策を講じた、そして彼らの「感情」を分析、データ化することに成功した。「アバター」に生殖活動を行う機能もつけることにも成功し、まずは一組の「アバター」で正常に作動するか実験が行われることとなった。

実験前日、二体の「アバター」の倉庫には紙切れがあった

「皆に見られるなど恥ずかしい。探さないでください」

この結果から科学者は実験を断念。事故防止のため遠隔操作で二体の感情データから「愛」に関するものを取り除き外部メモリに保存した。その後、彼らは滅んだという。

この二体の「アバター」の験体名は「アダム」と「イヴ」。

A-3

恋愛

恋愛とは古代より存在する人間の文化である。雄と雌の生殖作用をここまで文化的、優雅なものにしたのは実に人間の力によるとこだろう。とはいえ人間特有というのは違うかもしれない。動物だって求愛行動を取るものはいるし、夫婦の絆が存在する動物もいる。

だが、人間と動物のそれは決定的な違いがある。動物の恋愛は互いが近くにいなければ成立しないが、人間の恋愛に距離は関係ないということだ。

動物の恋愛の背後には必ず生殖行為、つまり動物的な本能が存在している。だが、人間の恋愛文化は確かに異性を求める部分で本能がいまだ強いこともあるが、人間は最初に言ったとおり恋愛を文化的なものに昇華した。すなわち、古くは平安の結婚システム、近年では遠距離恋愛である。つまり大切なのは体が常に繋がっているよりも心が繋がっていることに変化しているのだ。この部分で、人間とは自らの行為を精神的に高めるのが得意なものだということが伺える。恋愛だけでない、食事や埋葬もそうである。人間という生き物は肉体が欲求をただ満たすだけでは物足りなく感じるものなのだ。このことから、逆に文化を生み出したのは本能であり、文化的になったといっても、やはりいまだ理性よりも本能が恋愛において重視される理由もわかる。

今の時代やれ不況だ、やれ殺人だ、で世界は確実に病んでいる。こういい時こそ、人間特有のもの、文化による支えが大事になろう。つまり恋愛だ。それは人と人の心の駆け引きであり、癒し合いであり、本能である。これほどの行為は他にない。

この病んだ日常から脱するためには、この特殊性のある恋愛が重要になるはずである。日常から心も体も解き放つことで、自分自身をリフレッシュできるからである。もしも愛でこの世界が救われるのならばこれほど素敵なものはないだろう。

文化論

続・花と蝶と少女

今夜は数十年に一度の大流星群。私は華と二人、家の屋根に登って夜空を眺めていた。夜空を見つめる華は真剣そのものでそんな表情の華もまた可愛かった。

私、黒崎揚羽（くろさきあげは）と幼馴染の御苑華（みそのはな）が互いの想いを伝えあった河原での告白から半月ほど経った。父親の転勤についていく予定だった華は、今は黒崎家に居候している。私の両親は華の居候について二つ返事だったし、華の両親も黒崎さんの家なら、ということで認めてくれたらしい。もちろん、華と付き合っていることは内緒だ。でも、いつかはちゃんと話さなければ、と思っている。

華の横顔を見ながら、ふと思う。付き合っているとは言っても傍から見ればただの仲の良い友達、表面上は何も変わらない。そんな私たちの関係って何なのだろうか。

「ねえ、華、愛って何なんだろうね。」

「どうしたの、急に」

「いや、世間には私たちみたいな関係、認めない人もいるだろうし……」

華は少し考えてから答える。

「うーん、難しいことは分からないけど、好きな人がいて、その人が好きだと思ってくれるならそれでいいんじゃないかな」

「そんなもんなのかなぁ」

「そんなもんだよ。なーに、揚羽は周りが反対したら、私のこと好きじゃなくなっちゃうの？」

華がぷうと頬を膨らませる。

「そ、そんなわけないよ。私はいつだって華のことが好きだよ」

「うん。私も揚羽のこと大好きだよ」

そういって華は微笑みかけてくる。とたんに、私は自分の頬が赤くなっていくのを感じ、つい目をそらしてしまう。そんな私の様子を見ながら、華がふと、つぶやくように言う。

「あのさ、揚羽、五十年後も一緒にいようね」

驚いて顔を上げると、さっきと同じ笑顔で夜空を見上げる華がいた。

「うん、そうだね」

私がそう答えると華は悪戯っぽく私を見つめる。

「ねえねえ、揚羽、目つぶって」

「えっ、なんでよ」

「いいから、いいから」

私は目をつぶる。

「これでいい？」

「うん」

「！？」

「素敵な誓いの記念に私からのプレゼント」

そう言って微笑む華の姿は今日一番の可愛さだった。

A-5

次世代への

目の前一面に広がる真白い風景をを眺めながら、ひとつため息をはいた。はいたため息が見知ったように白く変化することはなく、目の前にある一枚のガラス板の大きさを物語っていた。

しんしんと降り積もる雪は普段の凶暴性を全く見せることはない。どんよりとした空からはいつもの通り、太陽の光が届きそうもない様子を呈していた。

家の中に貯蓄された食料はもういくばくもなく、自分がここで二度と起きない眠りについてしまうのは時間の問題であるというのは自明の問題だった。足下に転がる愛犬の毛皮を一撫でして、もう一度深く息をつく。震えた様子で吐き出された息になるほど自分はやはり死ぬのが怖いらしい、と他人事のように感じた。表層上は死ぬなんて怖くないと思ってはいてもやはり生物としての本能だろうか、小刻みに震える身体は自分の意志では制止させることができない。そんな身体を叱咤し、愛犬の顔をこちらに向かせた。自分で言うのもあれだが、目の前の愛犬は賢い。すぐに飼い主の意志をくみ取りこちらにつぶらな瞳を向けた。人間とは違い一面真黒な瞳をしっかりと眺めながら私は右手にあった解除スイッチを押した。がちゃんと言う音と共に頑丈にロックされていた扉の鍵が落とされ、ものすごい冷気が部屋になだれ込んでくる。殴りつけるような勢いの冷気は外の様子と相反してとてつもなく強い。そんなに時間をかけることはできなかった。

「それじゃあ」

寒さのためにすでに口は回っていなかった。が、かすれるように発せられた一言に込めた意味はいろいろあったがそれを全て察してくれたのだろうか、目の前の子は一つ鳴くとその豊かな毛に包まれた白い体躯を翻し、自分の身体と同じ色の風景へと飛び込んでいった。

これできっと、あの子は生きていけるのではないだろうか。

もしかしたら、ずっと後の時代には人間ではなく犬がこの地球上で栄えているような世界が有るのかもしれないと思うと面白かった。どんどんとシロに埋め尽くされていく視界に一つ笑みを浮かべると私はゆっくりと目を閉じた。

A-6

すべてを失ってしまう前に

空っぽ(しおれた)の心(野菜)を

そっとやさしく包み込んであげよう

小さな愛(サランラップ)で

渇いた心(野菜)に

「愛してる(サランヘヨ)」

愛の花言葉　恋の化学反応

僕の世界は色を失っていた。優等生を演じた先にあったのは、賞賛や栄光ではなく、嫉妬や憎悪ばかりだった。周囲の視線を耐え抜くには、感情を殺し、機械になるだけだった。実に容易かった。何も考えなければいいだけ。楽しむことを忘れた僕の視界は次第に灰色（グレースケール）になった。

でもキミは、そんな僕が変わる機会を与えてくれた。キミは化学部の部長でちょっと我儘なお嬢様。初めて会話したのは、僕が実験室に忘れ物を取りに行った時だった。キミは部活がない日に実験室の備品を勝手に私物化していたみたいだね。実験器具でコーヒーを入れるという発想は僕にはなかったな。しかも僕を見るなり、

「ちょっとコッチ来なさい。とりあえずコーヒーでも飲んで私と共犯になりなさい。」

なんて言ってきた。それからはずっとキミのペース。趣味は？化学は好き？花に興味ある？どうしてそんなに勉強できるの？純粋な興味を抱くキミ。なぜ僕に興味を、と思ったけど、素直に嬉しかった。忘れ物のことはすっかり忘れてしまった。でもこの出会いは忘れられなかった。

キミは蝶みたいな存在だった。ミステリアスな雰囲気を纏いながらも、自由奔放。そして何より花が好き。キミは学校の屋上にキミだけの花園を作り上げていた。これは観賞用、これは実験用、とキミは楽しそうに語る。勝手に花を育てようとも誰かが困るわけではないが、バレたらそれなりに叱られたであろう。でも、キミと一緒なら罪を重ねるのもいいと思った。何者にも縛られない蝶は、ひらひらと僕のひどく歪んだ心に入り込み、ポッカリと空いたスペースを埋めていった。

キミに会うのが楽しみになっていた。ある時は一緒にコーヒーを飲みながらテスト勉強したり、ある時は屋上で花に水をやったり。気づけば、キミから種をもらい、家で育てるほど花が好きになっていた。カラフルな花に囲まれ、僕は少しずつ色を取り戻していった。きっと、育てた花の芽が出た頃には、恋の芽も出ていたのだろう。ただ、機械がいくら旧型から新型になろうとも、未知の感情（データ）を理解するには時間がかかるものだ。それが恋だとわかった時には、キミへの想いが抑えられないほど大きくなっていた。

僕は屋上にいた。実験室に手紙を残してきた。屋上で待っている、と。時計の針に目をやる。時間を指定したわけではないが、キミを待ちわびていた。ふと、扉が開く音が聞こえた。続けて少しキツイ冗談が聞こえた。

「空をも見渡せる私の花園に呼び出したんだから、きっと素敵なお話なんでしょうね。違ったら燃やすわよ。」

どこか楽しそうな表情で僕の額にチャッカマンを突きつける。コーヒーを入れる途中だったのかもしれないけど、できれば火器は置いてきて欲しかったな。花もあるわけだし。キミはバーンと口で言ってチャッカマンを下ろした。でも、キミらしい科白に緊張が解けた。大丈夫。今から話すのは、きっと一生忘れることのできない素敵なお話さ。

「この花の花言葉をキミに捧げます。」

そして、キミから種をもらって大事に育てた赤い薔薇の花を渡す。花言葉は『愛情』、『無邪気』、『あなたのすべては可愛らしい』、『私はあなたを愛する』。これはほんの一部だが、赤い薔薇の花言葉はキミへの想いを見事に映し出していた。僕は愛の言葉を紡ぐ。

「好きです。付き合ってください。」

少しの沈黙。その後、彼女はここぞとばかりに手に持っていたチャッカマンの火をつけた。つい燃やされるのかと怯えてしまった。キミは僕の反応に笑いながら、こう言った。

「私があげた薔薇はマジックローズって品種なの。こうやって温度によって花の色が変わるのよ。」

赤い薔薇に火をかざすと、みるみる白くなっていった。どうやら演出はキミの方が何枚も上手だったみたいだ。

「これは私があなたにあげたものだから、やっぱりあなたに持っていて欲しいな。そしてこれが私の気持ち。白い薔薇の花言葉…わかる？」

もちろんわかる。だってキミのために色々調べたのだから。でもキミからの言葉が欲しくて、僕はつい知らないフリをする。そしてキミは恥ずかしそうに言う。

「言わせないでよ、バーカ。……大好きだよ。」

照れ隠しに舌を出す姿がたまらなく可愛かった。また少し、僕のライフは色を帯びて行く。

白い薔薇の花言葉は『私はあなたにふさわしい』

A-8

見つめあいたい
ただそれだけ

伝えあいたい
ただそれだけ

触れあいたい
ただそれだけ

つながりたい
感じていたい
信じていたい
そばにいたい

幸せ
ただそれだけ

愛してる

ただ、それだけ

～きっとこういう想いは単純に言葉にできないわけで、
そのためにこういう言葉があるわけで～

A-9

他人（ひと）を傷つけてばかりの私の心に
ちゃんと愛は存在していますか？
恋をしたら
他人（ひと）を愛せる人間になれますか？

他人（ひと）を愛せない私に
恋をする資格はありますか？

葛藤

A-10

「愛」の気持ちを

「愛」を辞書で引くと、「親子、兄弟がいつくしみあう気持ち」とでてくる。しかし、「愛」とは、人間の関係にとどまる言葉ではなく、もっと広く使われる言葉である。双方向性の愛情の気持ちがあれば、それは人間以外の関係でもそれは「愛」なのではないか。

「大相撲」は長い間それを支えるファンに愛され続けてきた。日本ではいわば「国技」と呼ばれているくらい日本人は相撲が好きだ。その大相撲だが、魅力を感じる理由は主に三つあると私は思う。

一つは、まず純粋にスポーツとしての面白さである。相撲の取り組みの勝敗には様々な要因が絡んでいる。それぞれの力士が得意とする形を持っていたり、力士どうしの相性があったり、その場所の調子の良し悪しがあったりして、たとえ横綱でもはるかに格下の相手に負けてしまうこともある。また、大きな力士を小さな力士が土俵の外に投げ飛ばしてしまうこともある。御贔屓の力士がいる人も少なくはなく、そういう力士を応援するのも楽しみの一つであろう。

二つ目は、記録である。江戸時代から続く長い歴史を持つ相撲だからこそ、過去にはすごい記録が数多く存在している。その記録が今現役の力士によってぬり替えられるたびに、改めて歴史の重みを感じるファンも数多くいることだろう。今年の三月場所で大関魁皇が幕内通算八〇八勝目をあげて歴代一位の記録としたときは、私もテレビの前で歓声を上げたものである。しかもその時の白星は長年ともに日本の角界を支えてきた当時関脇だった元大関千代大海に勝って得たもので、その千代大海は翌日に引退を表明している。さらに言うならば、魁皇が抜く前にその記録で一位だったのは千代大海の親方の元横綱千代の富士であった。この、魁皇の一番に何か運命のようなものを感じたのは私だけではあるまい。

三つ目は、いわゆる「形式美」である。大相撲には数多くのしきたりや慣習、制度が存在し、それらはその長い歴史の中で時代に合った形で変化し続けてきた。最近理事選挙により注目を集めた「一門」やこの下にある「部屋」の変遷などをたどって見るのも面白い。行司の仕事や、番付の仕組み、大相撲に関わる全ての要素一つ一つにそれぞれの歴史があるのだ。

しかし今、これだけの魅力ある大相撲が大きく揺れている。原因は複数力士の野球賭博であるのだが、昨今の角界の状況の悪化はこの問題だけでは片付けられないと私は思う。力士の稽古不足が指摘されたり、取り組み自体がつまらないものになっていることも大きな問題となっていた。これは、力士のファンに対する「愛」の気持ちが足りないせいではないか。ファンあっての大相撲である。ただ勝つために土俵に上がるのではなく、多くの応援や支援を背負って力士は土俵に上がっていることを忘れてきているのではないかと私は危惧している。野球賭博問題についても、力士がファンの人々のことをもっと考えているならば、こんな問題は起こらなかったかもしれない。

「愛」は「互いに」という関係が大事だ。ファンからの一方通行ではなく、角界のファンに対する「愛」の気持ちを今、見せてほしい。

A－11

落し物

森の中、一人で暮らす木こりは、ある日それを拾った。
それは美しい色をして、手に載せるとじんわり温かかった。
何だか分からないけれど、これは珍しいものを拾ったぞ。
木こりは、それを持ち帰ることにした。

ポケットに入れるとどういうわけだかとても重たい。
木こりは、何だか歩きにくくて邪魔くさいなと感じた。

もしかして食えるだろうか。
煮てみて、焼いてみて、蒸してみたけれどそれは硬いままだった。

削ってオブジェにすればさぞ美しいだろう。
鑿をあててみたけれど、それはびくともしなかった。

何の役にも立ちやしないじゃないか。
木こりは苦々しく思った。

ある日、訪ねてきた友人に、拾ったそれを見せてやることにした。
友人の手に載せると、それはどろんと溶けてなくなった。
あんなに硬かったのに。
キツネにつままれたような感じだ。

木こりは最後の最後まで、それが何だか分からなかった。
それは愛と呼ばれるものだった。

A-12

毎日何人もの人がすれ違うこの世界で
僕らが出会えた奇跡をいったいどうやったら君に伝えられるかな。

これまでしてきたことのどれ一つが欠けても
きっと僕らが今一緒にいることはなかったんだよ。

『――おぎゃあ、おぎゃあ』

今生まれたばかりの君には
まだわからないかもしれないけれど、
君は、奇跡のもとに愛されて生まれてきたんだ。
誕生、おめでとう。
僕らから、心からの祝福を君に――

幸せの瞬間

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	あなたは誰に届けますか？	8 pt	4 位	4 sp
		世界中から、たっくさんのI love you！ よく調べたなあ。 ワールドワイドな今週の表紙でした。いろんな解釈を誘って最多特別賞です、おめでとう！ 特別賞：19人の愛人賞（世界各地に19人の愛人がいるという解釈をする。） 何語で賞？（委員長一推しだったのよーん!!） totti賞（tottiくんが選びました！） よく調べましたで賞（そのまんまの意味で） イチオシフレーズ：「????」×３ 「Yo tee quiero」		
A02	プロローグ	7 pt	5 位	0 sp
		家族単位で引きこもってアバター通信。なんだかネット社会の暗喩のようですね。 そのアバターにだいじな生殖を託したものの（って、もっと前に気づけよって話ですが）、敢えなく逃亡され。一例の失敗だけで潔く撤退してしまう科学者さんは、諦めが良すぎる気もしますが、きっとそんな生物だったのでしょう。 そして、新たな「人類」へのプロローグ。 あちこち謎を残しつつ、深読みを誘うつくりでした。 宇宙のどこかに愛の外部メモリは眠ったまま……		
A03	恋愛文化論	0 pt	11 位	0 sp
		堂々の正統派登場。 人が動物と異なる誇るべきものとしての文化的恋愛。 ていねいな組立で、しっかり骨太にロジックが通っています。おつかれさま！ イチオシフレーズ：「やれ殺人」（命令文的な意味で。）		
A04	続・花と蝶と少女	2 pt	8 位	3 sp
		なんと、なつかしの続編。 甘いけれど、ちっともどろどろしていないふたりの姿がここちよい。 五十年後と言わず、もっと先までお幸せに。 特別賞：作者で賞（作者が班にいるとバレていたから） 勇気賞（顔がわれてる中、続編を出してきた勇気） 続編賞（続編だから） イチオシフレーズ：「！？」		
A05	次世代への	2 pt	8 位	0 sp
		寒く凍えて滅んでゆく人類。犬へと次世代を託して。 本能的に震え続ける身体、部屋になだれ込んでくる冷気の描写など、気持ちと空気感の表現がくっきりあざやかです。 作者さんの描写力に浸りきりました。		
		14 pt	2 位	1 sp

A06	無題（サランヘヨ）	サランラップでサランヘヨ。うまいなあ。 ＣＭにこのまま使えそうな、ナイス・リズム♪ ささっと仕上げて、さらりとシルバー・メダル、イチオシフレーズ大賞のおまけまで付きました。おめでとう!! 特別賞：サランラップ賞（うすっぺらい） イチオシフレーズ：「小さな愛（サランラップ）」「サランラップ/ヘヨ」「サランヘヨ」×３ 「愛してる（サランヘヨ）」		
A07	愛の花言葉 恋の化学反応	35 pt	1 位	3 sp
		あたかも全セッションの集大成。 すべてのお題を組み込んで、かつ、とても自然に王道恋愛。 チャッカマンにマジックローズとアイテム使いのすばらしさにブラボーです。狙い澄ましたゴールド・メダル、圧勝の戦績で飾りました。おめでとう、ねっしー!!! 特別賞：コラムキング（嘲）賞（まとめ的な） 努力賞（見た感じすごいがんばったのが伝わってきた） 今までのお題が全て入っているで賞 イチオシフレーズ：「私と共犯になりなさい。」「言わせないでよ、バーカ」		
A08	無題（見つめあいたい）	2 pt	8 位	0 sp
		「ただそれだけ」のフレーズがピリオドのように、あるいはエコーのように響いて、行間のとりかたも、だんだんとゆったりと、まるで眠りを誘う子守歌のような。 いいですね、このおだやかさ。		
A09	葛藤	3 pt	7 位	1 sp
		恋をする資格は他人を愛すること？ どちらが先で、どちらが後か。 ぐるりぐるり。因果はめぐる。自らの心のうちを見つめての自問自答のような。 特別賞：数学科賞（必要十分性の証明が必要）		
A10	「愛」の気持ちを	5 pt	6 位	1 sp
		作者さん、お相撲好きなんだろうなあという気持ちが伝わってきます。 これだけ愛してるんだからさ、しっかりリターンしてくれよ、と大相撲へのエールが力強く響きます。 特別賞：愛を感じるで賞（あふれでる「大相撲」への愛）		
A11	落し物	0 pt	11 位	1 sp
		あーあ、溶けちゃったんだ。いったい誰の落し物だったのでしょうか。 答えのない絵本。くっきり情景が見えてきて、なごみました。 そうもちろん、あの「命売り」で満場の魂をふるわせた絵本作家さんからの今期さいごの愛の贈り物です。 特別賞：臭（クサ）いで賞（とても惹かれてしまった、、、なぜか。）		
		12 pt	3 位	1 sp
		誕生の、祝福の瞬間。きっとこの赤ちゃんは幸せにすくすく育っていくんだろうなあと確信できる、しあわ		

A12	幸せの瞬間	せ満開のハッピーバースデイ。 ひとつもムダなフレーズのない、コンパクトなメッセージカードのような今学期の読み納めでした。おめでとう、ブロンズ・メダル！ 特別賞：愛の結賞（赤ちゃんかわいいよ！） イチオシフレーズ：「ーーおぎゃあ、おぎゃあ」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	あなたに「愛してる」って言ったら	14 pt	2 位	0 sp
		たっくさんの「愛してる」。 Ｂは、いろんなシチュエーション篇です。 ちょっと冒険しすぎじゃないかなあと付いていったら、幸せ色のラストにほっこり。シルバー・メダルでした、おめでとう!! イチオシフレーズ：「じゅてーむ」		
B02	愛称	2 pt	10 位	6 sp
		愛染さん、センスありすぎでしょ！ 学園ラブコメのオープニングのような、心うきうきの展開でした。 愛賞コールが花開いて、最多特別賞＆イチオシフレーズ大賞のダブル受賞です、おめでとう!! 特別賞：愛賞（愛染さんに田中って呼ばれたい） 愛賞（お題との適合） 愛賞（他と違う） 愛賞（「田中がいいと思います。」by愛染） 田中賞（かわいそうだったから。） 田中賞（実話ですか？） イチオシフレーズ：「佐藤君のあだ名は、田中がいいと思います」×３ 「田中」 「なんか愛染さんはこっち見てどや顔してるし。」×２ 「かわいいから許すけど」		
B03	譲らない想い	0 pt	11 位	2 sp
		わあ、譲らないんだ、たくましい。 ねちねちとストーカーするのではなく、堂々と砕け散りに行く。それでこそ！ 特別賞：ストーカーに注意!!賞（これがエスカレートしたらストーカーになってしまいそうだから。） あきらめま賞（こだわりすぎ）		
B04	愛の配達人	17 pt	1 位	0 sp
		千通に一つのきらめき、と思いきや。 あーあ、川に流しちゃうんですね。まごころこもった真実の愛の手紙だったのに、娘の心に届かない。義理の返事しか戻らない。 童話っぽく展開しつつ、恋愛の実り難さを寓意するような、せつないラストでした。 しあわせローズを選んだAブロックに対し、悲しみ川を選んだBブロックという対比になるでしょうか。 ラストの覇者は、なんと先週の「うぉりゃああ」、ディフェンディング・チャンピオンの連覇でした。おめでとう!!!		
B05	無題（未来を）	3 pt	9 位	0 sp
		いやあもう、こんな決めセリフを言われたら、断れないよね。 ぐさり。一生忘れがたくなりそうな勝負フレーズでした。 イチオシフレーズ：「私じゃなくて、私と同じ未来を観てほしいの。」		

B06	The meaning of the Love	0 pt	11 位	0 sp
		「愛ってなんだろう」 こつこつと一行ずつていねいに積み重ねてゆく問いかけ。 その誠実さが好印象です。 タイトルのフォントもいいなあ。		
B07	あたしの心が抱くもの	9 pt	6 位	1 sp
		あまぁあああああい！ ＴＡ陣の絶叫が響き渡りましたとさ。 いやもうここまで徹底して甘いのは、いっそ大アリでしょう。おしあわせに。 特別賞：ゆー賞（ゆーだから。） イチオシフレーズ：「誓いのキスのつまみ食い……怒られちゃうかな」 「つまみ食い」 「『ゆー』love you.」		
B08	愛することは素晴らしいことである	4 pt	8 位	0 sp
		「愛なんて、ふんっ」 ちょっとナナメに構えて、でも愛への関心大ありのツンデレ姿勢と見た！ 違うかな。 もっと語ろうぜと読者サイドからいじりたくなる親しみやすさがナイス。		
B09	願い。	13 pt	3 位	0 sp
		シリアス一直線。一段階ずつ着実に容態が下降してゆく描写が哀切です。 すごい描写力、ほんとに迫真のリアリティですね。 おめでとうブロンズ・メダル！		
B10	つないだ手	12 pt	4 位	0 sp
		もちろん物理的に手をずーーーっとつなぎ続けることはむずかしいけれど。 心と心が、いろんな困難に耐えつつ結ばれ続ける、そんな強い愛の姿を「手」に象徴させて、くっきり印象的です。		
B11	「いろはにほへど…」	5 pt	7 位	1 sp
		ゆっくりと変わりゆくもの。ふるさとだって、それは同じ。たまに訪れるからこそ、そんな変化がしみじみ実感できる。 特に事件は起きないけれど、学校やおじいちゃんや、日常のなかに小さな「変化」を読みとる作者さんの繊細さが光ります。 特別賞：文部科学賞（教科書に出てきそう） イチオシフレーズ：「いろはにほへど…」		
B12	無題（ないと寂しいんだもん。）	11 pt	5 位	5 sp
		何に見えるかな？ ハンマー？？ フェニックス発、親知らず経由で、「だもん」に着陸した作者さん、狙われていると知りつつ、今週もやっぱりＴＡさんのツボでした。 ラ行がないことは、じつは作者さんもＴＡさんも気づいてなかったとか……。 特別賞：”あい”が足りない賞（ついでに”ラ行”もないですよね） あいなし賞（ラ行なし） アイデア賞（発想がよかった） ら行がないで賞（だってら行がないんだもの） 賞（賞の名前ないと寂しいんだもん） イチオシフレーズ：「ないと寂しいんだもん。」×２		